

「エンジンバラ返じゃあ、まだまだ遠いから大変よねえ。頑張ってね」
「ありがうございます。」

「エンジンを取りあえずは、ガイアーン迄で出て、バスでピーターバラへと移動し、そこから
トッチでの再スタートと云うこととした。バス代は二五ペンスだった。

それと、再出発地点へと移動してはみたものの、それでも、なかなか容易には車を拾えなくて
時間を費やしてしまったものだった。

「やはりの、トッチでの旅行と云うのは容易なことじゃないなあ。諦めた方が良いのかなあ……。
そんな弱音の雑念も過ぎつたりする中で、漸く、次に停まってくれたのは五十歳前後位の紳士、
ブライアン氏だった。

「じつは、私は今、エンジンバラを目指しての旅行中なのですが、途中の何処迄でも結構です
の、乗せて頂けなさいませうか。」

「はい。まあ、途中のニューヨーク市迄なら、いいよ。」

「有難うございます。私はイナヤマ・サトルと申します。日本からの旅行中です。宜しくお願
いします。」

「はい。私はブライアンと云うものです。ニューヨーク市に住んでるのですが、今は帰省の途中
だから。」

軽い雑談を交わしながら、しばらく歩くと、内には、お昼時の時間帯に差し掛かって来てい
た。

「おんな、お昼にはなると、良かったら、我が家でも誘って行くか。」

「はい。それは、嬉しいなあ。」

「はい。」

「はい、ブライアン氏の自宅まで招
待頂いた。

「じつは、私の妻、マリアと、中学生の娘、サリ
ーと小学生の息子のトニーだけ。」

と、私への家族の紹介を頂いた。
子供たちも「じつは、かな笑顔をくれて、軽く握手
をする。

本当に、可愛いくて素敵な子供たちだなあ、と
は内心、思ったものだった。

「はい。」

「じつは、サトル君と云って、日本からの旅行
者だよ。これから、エンジンバラ迄行く予定です。」



と、家族への紹介を頂いた。

「イナヤマ・サトルです。今日は主人様に拾って頂き、いろいろとお招き頂きまして大変嬉しく思います。ありがとうございます。」

「度々お昼時でもあり、奥さん手作りのランチを、ご家族皆さんと一緒に馳走頂いた。

「ピッチハイクの旅行を通しては、いろいろして現地の人達とのふれあいや、また、おもてなしの人の優しさみたいなものに接する機会と云うのは本当に有難いものであり、一番の幸せな瞬間でもあり、旅の醍醐味とでも言えるだろう。また、道中での楽しい思い出もたくさんある。」

「ランチを頂いて、しばしの休息のあとには、ご家族の皆さんにも見送られながら家を出て、フリーアン氏には近くのインターチェンジ迄を送って戴いた。

「君と出会えて楽しかったよ。」の後も楽しい旅を続けて、無事に日本に帰れるよう、旅の成功と幸運を祈っているよ。良い旅を。」

「有難うございます。私にとっては、人生での良い思い出になりました。お世話になりました。」と、別れを告げた。

然しながら、ここからの再スタートでも、また、なかなか次の車は拾えなかった。

その内には雨まで降りだして来たので途方にくれていたものだったが、漸く、次に停まってくれたのはヨーク市内セント・ジョーンズ・カレッジのスタンレイ教授だった。

「何処まで行くの？」

「エジンバラを目指しての旅行中です。途中の何処迄でも結構なんですが…」

「今日中にエジンバラ迄は無理だね。ヨーク市迄ならいいよ。」

「あ、ありがとうございます。それは、助かります。宜しくお願いします。」

「はい、ありがとうございます。」

「日本からですか？」

「そうです。私はヨーク市内のセント・ジョーンズ・カレッジで教授をしている者ですが、日本には、昨年の十一月に京都での会議があった際に行きましたよ。京都は良い所でしたよ。」

「そうですか？」

「処で、先日のニュースで、日本では大雨での大きな被害が出ていたけど、そのことは知っているのかな？」

「いえ。いろいろした放浪の途上ではニュースに接する様な機会と云うのは全くないですからね。」

「全く知りませんでした。」

「いろいろ…。まあ、それは仕方ないよね。」

「日本での私の知人や友人達にしても、今の私が何処で、どうなっているのか、生きているのか、どうなのかさえも全く何も判らない状況ですわ。何処かで葉書を出したとしても、届くはずか？」

「はい一週間はかかります。それに、毎日の私の所在地も不定ですから。」

「そうだなね。それは仕方ないことだけれど、まあ、道中では気を付けて、良い旅行を楽しんで欲しいよ。旅の成功を祈っているよ」

「ありがとうね」

「だから君は、スペインランドの方に向けて北上して行くよ。Rの発音が聞き取り難くなって来るだろうな。北の方に行くに連れて、Rの発音は巻き舌が強くなってくるんだよ」

「そうですか。日本でも地方によつては発音や言葉の違いと云うのは様々ですね」

「それはイギリスでも同じようなものだよ」

「私は、イギリスでの旅行は初めてなのですが、ヨーク市と云うのはどの様な街でしょうっ？」

「ヨーク市は古い都市だから、古城や遺跡などが多いんだよ。だから、時間が有ったら明日には少し見学して行くのを勧めますよ」

「解りました。明日は、市内のあちこちを見学してみようと思います」

「君は、今夜は何処に泊まるのかな？」

「ヒッチハイクの旅行ですから、いつも、予定や予約は無いのですが、ユースホステルがあったら利用したいとは思ってます」

「そうかい。。。じゃあ、ヨーク市内のホステル迄は送って行くよ。夕食は「馳走」ですね」「えっ。本当ですか。何から何まで、親切に、ありがとうになります」

すつかり、雨模様の中ではあったが、スタンレー氏にはレストランでの夕食をい馳走になった。

「何でも好きなものを取りなせよ」。

今ではステンレスのパイプレールの上を、トレーを滑らせながら好きな食品をトレーに取って進むという設備と手法は何処でも見かける光景なのだが、当時に見掛けたのは初めての機会ではあった。東京での生活をしていても、日本の国内で初めてそれを見掛けたのは、それから半年くらいを経過した年末か翌年始辺りのことではあった。

レストランでの夕食をい馳走になったあとは、市内のユースホステル迄送って戴いた。

「じゃあ、お別れだね。ほんの少しのお



手伝いだっただけど、貴方の幸運と日本に無事に戻り着くまでの旅行の成功を祈ってますよ」

「ありがとうございます。良い思い出になりました」

今回のヨーク市内のコースでは、初めて同宿の日本人客が加藤氏だった。

彼も同様にヒッチでの旅行中だったので、意気投合して話を通じたものだった。

「ヒッチで行こう！ 日本人の誇りをもってー」とのメッセージをくれた。

（八月六日、月）

翌日には、何とか雨は上がったものの、どんよりした空模様だった。

朝の九時半過ぎにユースを出たが、前日のスタンレイ氏のアドバイスを聞いていたので、

市内のヨークミンスターや、あちこちを散策見学して周った。

万里の長城の城壁の一部の様な石造り建物や中世風な建築物が多く残っている。

途中で腰を下ろしての休憩中には、旅の疲れからか、しばしの間は居眠りしていたものだった。午後の三時過ぎにはヨーク市からの再出発とした。

ここからでの最初のヒッチは、前日までの苦労に比べると楽なものだった。

一台目では、国道一号線のインターチェンジで降ろしてもらい、次の二台目にも容易に乗り継ぐことが出来たのは幸運だった。

やはり、魚釣りでの、釣り果の良い所と悪い所がある様に、車のヒッチも拾い易い所と、なかなか難しい所と云うのはあるようだ。

次の二台目では、途中でカフェに立ち寄っての「コーヒー」をご馳走戴いた上に、かなりの長距離



で夜明かししていました」

「そうでしたか。エンジンバラ返はまだ少々、距離がありますが、道中気を付けてください。幸運をー」

「ありがとうございます」

想定外の無料施設での宿泊ではあったが、警察の方では、たまたまの通りがかりに、電話ボックス内のホームレスらしき不審者(?!?)に気付いての声掛けだったのか、或いは、近隣からの通報による駆け付けだったのかは不明なもの、ともあれ、無事に一夜を過ごしてこの朝を迎えることは出来た。

少々、足元がよろめきながら狭いボックス内で立ち上がり外へ出ると、再び、ここからのスタートとなった。

運次第ではあるのだが、やはり、なかなか、車を拾うのも容易なことではない。

漸く、拾えた最初の一台目では余り距離を稼ぐことが出来なかったのだが、幸い、今度は余り時間を要しないで、次の二台目に繋ぐことが出来た。

「済みませぬ。エンジンバラを指摘して頂きますが途中迄でも乗せて頂けないでしょうか？」

「ああ、僕らもエンジンバラ返だから、いいよ。おっけい」

「ありがとうございます。私はイナヤマ・サトルと云います。宜しくお願いいたします」

「オレはケリー、彼女はナンシーだよ」

「ハネムーン旅行ですか？」

「そうだよ。レンタカーでの旅行中だよ。カリ

フォルニアから。君はどちらからなの？」

「あ、私は日本からです。イギリスに入ってからでは、もう三週間くらいになります。ウィズビーチという所の農場キャンプで二週間を過ごしましたが、そこを出てからのピッチハイクで、今日は三田田です。なかなか、ピッチハイクの旅行も簡単ではないですね。🌧️ 昨夜にはトラックから降ろされた所が、あの田舎の何も無い寂しい所でしたから。仕方なく、近くにあった公衆電話ボックスの中で寝ましたよ」

「ははは、それは大変だったね。じゃあ、その内にドライブインでもあったら、朝食だけでもいいか？」

「ふひひん」



とてもあれ、二人だけの水入らずの中に割って入った様なお邪魔虫ではあったかも知れないのだが、若者の旅行者同士という点では相通じる処があった様な気がしたものだ。

途中のドドライブインでは三人で一緒に軽い朝食を摂り、お昼前の十一時頃には無事にエジンバラの市内に到着した。

「着いたね」

「ありがとうございました。助かりました」

「良い旅行をー 幸運をー」

「あなた達も良い旅行をー そして、お幸せにー」
と声を掛け合って彼らとの別れがあった。

その後には、市内のインフォメーションセンターに着いて、リーフレットを買ったとエジンバラ、ポンポンと、背後から肩を軽く叩かれた。
振り返ると、ウェズビーチのキャンプで一緒だった千村君だった。

「いやあ、まさか、こんな所で面識のある人に出会うとは驚いたよ😲。 凄い偶然だなあ(笑) 互いに驚き合ったものだった。

「稲山さんは、ここまではどうやって来たの？ 全部、ヒッチハイク？」

「イエス。 ザツン・オール。 結構、苦勞したよ。 ヒッチハイクもなかなか大変だ。 甘くはないな

あ(笑) まだ、この後にはロンドン迄の戻りもあるんだけどね…」

「全コース、ヒッチハイクとは凄いなあ😲。 じゃあ、お気を付けて!! 頑張ってください」

「お互いに。 良い旅行を!!」

と彼とは二度目の別れがあった。

その後には、市内を一巡して、夕方には市内のユースホステルに辿り着いた。

エジンバラではロンドンに次いで、多くの日本人(らしき)旅行者を良く見かけるようだ。

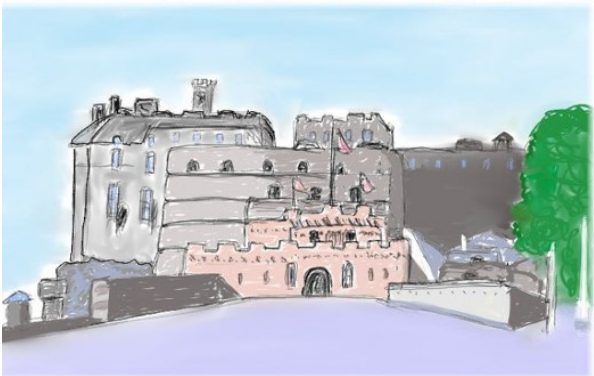
街中でのショーウィンドーを覗いてみても、馴染みの日本製品を良く見かけるのは驚いた。 日本経済の成長の勢い云々のが何処に行っても身近に感じられる様だった。

ユースでは、他に日本人客と云うのは見当たらない様なので、おそらく、日本人客と云うのは殆どの場合、普通に旅行会社を通しての事前予約で一般のホテルを利用していること云うことなのだっ。

(八月八日、水)

翌日の午前十時半頃は街に居て、エジンバラ城やカルトンの丘、スコットランド国立美術館などを見学した。

初めて見るスコットランドの首都エジンバラは、中世の雰囲気そのままに残り、歴史の重みを感じられる美しい街並みである。



エジンバラにて

エジンバラ城はキャッスル・ロックと呼ばれる岩山の上に建つ古代からの要塞城である。幾度かの戦争の度に破壊されては再建され、の繰り返しがあり、スコットランドの歴史の証人とも言われる古城である。

その高台から眺める街の全景と周囲の眺望は素晴らしいものだった。

終日、あちこちを歩き回っていたので少々疲れてしまったが、夕刻の六時半頃にはユースに戻り着き、もう一泊するつもりだった。

翌朝には、なるべく早めにここを発って、ロンドンへの帰路に就こうとは思っている。



いだらうこの覚悟を決めて、やや、大き目の立木の近くを枕側にして寝袋を広げた。

エンジンバラからの道中では天気も余り良くは無かったので、雨模様の後でもあったのだろう。草木も湿っぽいのだが致し方ない。

暗闇の空を見上げながら、その昔には、ビートルズもこの地からのデビューで世界に踊り出たんだなあ……。そう謂えば、中学時代に海外文通でのやり取りをしていたーナ・マリアと云う女の子の住所も確か、このリバーの地だったな……。などと、色々と、様々な妄想が流れながらの寝付きとなった。

翌朝に目覚めるまで、やはり、周囲は団地に囲まれた中庭の様な芝生の原っぱだった。

今更のこと、それはそれで良いとしても、寝袋の端の方では犬の落し物を少々踏んでいた。

（こんな所で……。犬の落し物は飼い主の責任で、ちゃんと始末をして欲しいものだ……。とか何とか、何処かにぶつけたい様な心情は胸中に湧き上がりながらも、まあ所詮、文句を言える様な立場でもない。😓）

（ 八月十日、金 ）

ともあれ、夜半には雨には見舞われずに済んだので、何とか安眠を得ることは出来た。

起床後には、傍目に目立たない内に、と荷物を纏めてから歩き始めて、一時間余りを過ぎた辺りからリッチを始め。

次に停まってくれたのは若い女性ドライバーだった。

「ロンドン逆向かうのですが、途中の何処迄でも構わないので乗せて頂けないでしょうか？」

「そんなに、遠くまでは行かないので、少ししか乗せてあげられないですよ。」

「ああ、何処迄でも大丈夫です。助かります。」

「……。あなたはお名前が何ですか？」

「日本からです。もう、イギリスに来てからは三週間以上になります。これまでは沢山の

方に同乗させて頂いたのですが、あなたは随分、お若いんですね。」

「十八歳です。」

「……。あなたは何処迄乗せて頂いた方の中では、一番若い方でしたよ。今田は、これからお仕事

ですか？」

「……。あなた、途中までの少ししか乗せてあげられなければ、いじめんならね。」

道中での愛想も良かったので、朝からの天気が晴れ上がってきた様な気分ではあったのだが、距離が短かったのは、少々残念なところでもあった。

もう少し、あ、あ、三時間、距離、でもあれね、もう、仲良くなれたのかも知れないだろうか……。

次のチャレンジでは、たまたま、リュックを背にした地元英国青年との出逢いがあった。

「……。君は何処迄？」

「ロンドンだよ」

「じゃあ、オしも同じだよ。一緒に拾おうぜ」

「オーケー」

どちから先の声掛けだったかは定かでないものの、お互いに目が合った瞬間での以心伝心と云った様な処だろう。頭の中での妄想は同じ状況なので、会話上でのやり取りはそんな処だった。

かくかくしてしばらくの間は二人での旅の道連れとなった。ほどなくして運よく大型トラックを拾うことが出来た。一人して同乗させてもらう。

ヒッチハイクで車を拾うのは場所と運次第ではあるのだが、今回のトラックではかなりの長距離を運んでもらえたのは幸運なことだった。

ロンドン手前での、最後にはドライブインに立ち寄って、運転手さんを含めた三人での軽い朝食を取る。

トラックの運転手さんとはここで別れる。

ゴールのロンドン迄はあと一時間程度と云った様な処だろう。

その後、今度は英国青年とロンドンでロンドンの小型車を拾うことが出来た。

凡そ一時間くらいの走行後にロンドン市内の地下鉄駅まで送り届けて頂いた。

ここで運転手さんと英国青年とも別れを告げたあと、地下鉄で移動し、市内ケンジントンの田舎でのユースホステルに到着したのだが、空きが無いとの理由で断らされた。

他のユースにも足を運んではみたものの、やはりこちらも同様だった。

仕方なく、今宵はハイドパークのベンチでの野宿とした。

想定外ではあったのだが、野宿の二連泊となった。

当然のことかも知れないだろうが、七八月のロンドンのユースと云うのは格別に混雑するものだった。

（八月十一日、十二日）

昨夜来は天気も良くなってきたので、公園での宿泊も、まあ、そんなに悪くはないだろうかと思っていたのだが、やはり、ベンチでの奥行きのない窮屈さや、コロコロした硬さの上では寝心地も良くはなかった。

明け方近くには、取り留めない様な夢を何度も見ていたものだった。

翌朝には、木の葉の間から漏れてくる日差しに眩しさに目覚めて起きたのは八時半頃であった。

この後には、特に何処かへ行くつもりも無いのだが、取りあえず、ピクトリア駅の付近までを歩いて来た。

ふと、背後から聞き覚えのある様な声が掛かったので振り返ると、何と、エンジンバラでの再会

以来の千村君だった。

何という偶然、奇跡だろうかとお互いに笑って、驚き合ったものだった。

少し話をした後」

「では、お元気で！！ 良い旅行を！！」

と、お互いに言葉を掛け合って別れたものだが、そもそも、ウィズビーチのキャンプ場で別れた後には、エジンバラでの偶然の鉢合わせと別れがあり、そしてまた、これが二度目の別れの機会となったのだから、ある意味、奇跡としか言い様のない程のことだろう。

(その言葉は、今頃には、彼は何処で何をしていることだろう……。互いに年輪を重ねてしまったものだが、可能なことならば、再会出来たら面白いものだろう)

その後の午前中には、バッキンガム宮殿に足を運んでみた処、丁度、衛兵交代の時間帯を控えていたので、終わりまでを見学した。大変な人出だった。

午後には、シエームズパーク、トラファルガー広場を散策し、夕方には再び、ピクトリア駅に舞い戻った。

ウィズビーチを出てから、スコットランド方面の旅行中には余り天気が良くなかったこともあり、肌寒さを感じる様な日々ではあったのだが、今日は天気も回復して晴れ上がったので、真夏の暑さの一日だった。

さて、ドーバーからフランスのダンケルク迄の切符を入手したので、今夜十時のロンドン発の列車では、これ迄二十五日間を過ごしたイギリスともお別れになる。

人生の将来においては、再び、この地を訪れる様な機会と云うのは、果たして、あるだろうか……。

明日からは大陸での旅行になるが、果たして、どんな日々が待っているのだろうか……。

